



モーム

人間の絆

大橋健三郎 訳

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第29巻

モーム 人間の絆

昭和 42 年 9 月 20 日初版発行

昭和 44 年 7 月 1 日再版発行

訳 者 大橋健三郎

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定 価 750 円

製 本・加藤製本株式会社

製 函・加藤製函印刷株式会社

本文用紙・三菱製紙株式会社

表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町3の6

電話 東京(292) 3711(大代表)・振替口座 東京 10802

目 次

モ 一 ム

解 説	年 表	人 間 の 絆	ま え が き
.....			
489	479	8	5

巻頭口絵 南フランス・モーレスク別荘にて
© 1967 Time Inc.

本文カラーさし絵
デンバー・ギレン

© 1967 Denver L. Gillen

装 幀 亀倉雄策

人 間 の 絆

大橋健三郎 訳

主要人物

フィリップ・ケアリー 本編の主人公。不幸なことに生まれつきびっぴで、そのうえ幼くして両親を失う。その後は幾多の人生経験と苦悩をなめ、生きることを意味をさとする。

ウィリアム・ケアリー フィリップのおじ。ブラックステイブルで牧師をつとめる。孤児となった甥をひきとるが、田舎名士によくある偏狭なエゴイスト。フィリップの反抗にてこずる。

ルイーザ・ケアリー その妻。わがままで冷淡な夫につかえるあわれな女。子供がなくフィリップをわが子のように可愛がる。パリにたった甥の身の上を案じながら他界する。

トム・パーキンス キングズ・スクールの新校長。古い学校に新風をおくりこむ。彼のみちびきで、フィリップは神に生涯をささげようと決心するのだが……

ヘイワード ハイデルベルヒ時代に知り合ったイギリス生まれの文学青年。フィリップは彼の感化で、芸術・文学への憧憬をふかめる。南阿戦争に応召し、あえない最期をとげてしまう。

ウィークス アメリカ生まれの異端者のな神学生。無神論者のヘイワードと宗教論をたたかわす。

ミス・ウィルキンソン おじの家に滞在するオールド・ミス。フィリップと情事を結ぶが、冷たくあしらわれてドイッへ去る。

ファニー・ブライス パリの画学生。自惚れのつよい女で画才が

あると信じている。フィリップをひそかに恋するが、失望と孤独のうちにみずから命をたつ。

クロンショー 詩人を自称するボヘミアン。パリの芸術家志望の青年に薰陶をおよぼす。フィリップにベルシアじゅうたんを贈る。

ローソン フィリップの親友。パリの下宿で共同生活をし、芸術・文学など賑かに語り合う。

フォワネ 画塾の先生。フィリップの画の凡庸なることをさとし、生きる道をほかにもとめることをすすめる。

ミルドレッド 喫茶店につとめるウェイトレス。ギリシア型の美人。妖しい魅力にとり憑かれたフィリップをほんろうする。典型的なあばずれ女。

ネズビット（ノーラ） 夫と別居中の通俗作家。逆境にあっても明るさを失わず傷心のフィリップに母性的な愛をそそぐ。

ミラー 妻子がいながらミルドレッドをだまして結婚する。グリフィス 医学校の友人。フィリップの目を盗んでミルドレッドの浮気の相手になる。

ソープ・アセルニー コピライター。餓死寸前のフィリップを救う。

サリー・アセルニー ソープの娘。物静かで控え目な女。フィリップと結婚する。

まえがき

この小説はたいへん長いものだから、自分で序文を書いていっそうそれを長くすることは、まことに気がひける。著者というものは、おそらく、自分自身の作品についてはけっして適切にものを書くことのできない人間であろう。この点に関しては、著名なフランスの小説家ロジェ・マルタン・デュ・ガールがマルセル・ブルーストについて語った、ためになる話がある。ブルーストは、あるフランスの雑誌に、自分の偉大な小説についての重要な論文が掲載されることを望んでいたが、それを書く最適な人間は自分以外にはないと考えて、机に向かってみずからそれを書きあげたものだった。それから、彼は、若い友人の文学者に、その友人の名前でその論文を編集者に送るよう頼んだ。青年はいわれた通りにしたが、二、三日すると、編集者から呼びだされた。「あなたの論文はおことわりしなければなりません」と、編集者は彼に告げた。「こんなにお座なりで冷淡な、あの人の作品についての批評を載せたら、マルセル・ブルーストはけっして私を許してはくれませんかからね」著者というものは、自分の著作については神経過敏で、好意的で

ない批評には腹をたてがちだが、自己満足などはめったに感じないものなのだ。たいへんな時間と労苦をかけて生み出した作品が、どのくらい自分の構想にそぐわないものかをちゃんと知っているし、それを考えると、自分で満足のゆくそこかしこのいくつかの文章に心を楽しませるところか、最初の構想を完全に表現しえなかったことにひどく心を悩ませるのである。彼らの狙いは完全ということであり、それを達しえなかったことを、みじめにも彼らはちゃんとわきまえているのだ。

だから、私は、自分の本そのものについてはなにもいわずに、ただ、この序文の読者に、小説としてはかなり長い生命を保ってきた作品がいったいどのようにして書かれるようになったかという、いきさつを語るだけで満足することにした。もしそれが読者の興味を惹かないなら、お許しを乞うよりほかいたしかたがない。この小説は、セント・トマス病院で五年間をすごしたあと、二十三歳で医師としての学位をとって、いよいよ私が作家として一本立ちしようと決心してセビリヤに赴いたときに、はじめて書いたものである。そのとき書いたこの本の原稿はまだ残っているが、タイプにしたものを校正して以来、一度もそれをのぞいてみたことはないし、それがたいへん未熟なものであることに、私はなんの疑いももっていない。私はそれを、最初の本を出版してくれたフィッシャー・アンウィンに送ったが（まだ医学生だったころ、私は『ランベスのライザ』という小説を書き、そこばくの成功を納めたのだった）、彼は、その印税として私が欲しがっていた百ポンドの金をくれることを拒絶したし、そのあとで原稿を送ったばかりの出版社の

いずれも、どんな値段でも受け入れてくれようとはしなかった。当時の私は、これにはがっかりしたものだだったが、いまから考えてみれば、自分が幸運だったことがわかる。もし、どこかの出版社が私の本を受け入れていたら（そのときは『ステイ・ヴン・ケアリー』の芸術的気質』という表題だった）、私はまだ若くて適切なあつかい方を知らなかったひとつの主題を失ってしまうことになったに違いない。自分で描いた事件からそれほど時間的に隔たっていなかったので、うまくそれを利用することはできなかったし、のちに、ついに書き上げた本を豊かにすることになった若干の人生経験も、まだ経てはいなかった。

また、知らないことについて書くよりは、知っていることについて書くほうが容易であることも、私はまだ学んではいなかったのだ。たとえば、私は主人公を、ドイツ語を勉強させに（自分の住んだことのある）ハイデルベルクにやるかわりに、フランス語を勉強しに（ただ、たまたま訪問したという程度の知識しかなかった）ルアンに赴かせたりしていたのである。

このように出鼻を挫かれたので、私はその原稿を篋底にしまいこんだ。いくつかほかの小説を書いて出版に成功し、また戯曲を書いた。まもなく私は、たいへん成功した劇作家になり、生涯を演劇に捧げようと決心するにいたった。しかし、私は自分の決心をむなしものにしてしまう、自分のなかのある力を考慮にいれていなかったのである。私は幸福で、はぶりがよく、多忙だった。頭は書きたい戯曲でいっぱいだった。成功を納めても予期したとおりの結果が得られなかったせいか、それとも、或功にたいする自然な反動のせいかはわからぬが、当時

の最高の人気劇作家としての地位を確立するやいなや、私はふたたび、おびただしい過去の生活の思い出にとり憑かれはじめた。夢のなか、散歩の途中、リハーサルの最中、あるいはパーティーの席で、思いでは私を圧倒せんばかりによみがえってくるので、私は、それから解放される道はひとつしかない、それはその思いですっかり紙に書きしるすことだ、と心に決めた。数年間、息もつがせず演劇の仕事に身を捧げてきたあとでは、小説のもつ幅広い自由が欲しくてたまらなかった。心にかかっている本が長いものになることはわかっていたし、邪魔をされずに仕事をしたかったので、私は、マネージャーたちが熱心に提供しようとしていた契約をこわわって、一時的に劇壇から身を引いた。ときに、三十七歳だった。

職業的な作家になってからの長いあいだは、私は創作の作法を学びとることに多くの時間をかけ、文体をみがこうとしてたいへんつらい訓練をみずから課したものであった。しかし、自分の戯曲が上演されはじめたころには、そうした努力は捨ててしまったし、ふたたび小説を書きはじめたときには、狙いはべつのところにあった。私はもはや、以前には多大の労力を浪費して達成しようとするむなししい試みをくりかえした、珠玉の散文、豊かな文章のきめなどは求めなかった。それどころか、私は、平明単純を旨としたのである。穏当な制限の範囲内で行いたいことは山ほどあったので、語数を浪費する余裕などないことを感じとった私は、いまや、意味を明瞭にするのに必要な語だけを用い

んで、仕事にとりかかった。装飾の余地などまったくなかった。劇場での経験から、簡潔の価値を教

わつてもいた。私は二年間たゆみなく書きつづけた。自分の本にどういう表題をつけていいかわからず、あちこちうんと探しまわったあげくに、『灰より生まれでし美』というイザヤ書の文句を見つけた。これはびびったかと思つたが、この表題はすでに最近使われていることを知つたので、べつのを探さねばならなかつた。とうとうスピノザの『倫理学』中の一冊の表題を選んで、自分の小説を『人間の絆』と名づけたのである。最初に思いついた表題をつけえなかつたのは、またもや幸運だったと、私は考へている。

『人間の絆』は自伝ではなくて、自伝的な小説である。事実と虚構が渾然と一体になっている。感情は私自身のものだが、できごととは、必ずしも起こつた通りに語られているのではなく、あるものは、私自身の生活からではなくて、親しかった人たちの生活から、主人公に移しかえたものだ。この本は、私の望み通りの結果をもたらしてくれ、世に公にされると（それは、おそろしい戦争に苦しみ、自身の苦悩と恐怖に心をわずらわせるのあまりに、小説中の人物の冒険などには気をかけるゆとりももたぬ世界だったが）、私は、自分を苦しめていた苦痛と不幸な思いでからすつかり解放された。批評はなかなかよかつた。シオドア・ドライザーが『ニュー・リパブリック』誌に長い批評をよせて、彼の書きたいっさいの文章をきわだたせている、あの聡明さと同情をもつてそれをあつかつてくれたが、しかし、どうやらこの作品も、おびただしい量の小説と同じ世の常の道を辿つて、日の目を見てから、二、三か月もすれば永久に忘れさられてしまうように思われた。ところが、どういふ偶然かは

知らぬが、それは、たまたま数年たつてから合衆国の若干の著名な作家たちの注意を惹き、彼らが新聞雑誌でしょっちゅうそれに言及してくれたおかげで、次第に一般読者の注意にのぼるようになったのである。この本がこのように寿命を延ばしたのは、これらの作家たちのおかげであるし、年月がたつにつれて、それがいよいよ大きな成功をおさめつづけたことにたいして、私は彼らに感謝しなければならない。

灰色の、どんよりした夜あけだった。ぶあつい雲が空をおおい、空気がうすら寒くて、雪を思わせる。乳母が子供の寝ている部屋にはいつてきて、カーテンを引きあげた。なにげなく、向かいの、柱廊玄関のついた化粧しつこい造りの家にちらと目をやると、子供のベッドに近づくと、

「起きるんですよ、フィリップ」彼女はいった。

寝具をめぐって子供を腕に抱きかかえ、階下につれていく。子供はなかば夢うつつだ。

「お母さまが呼んでらっしゃいますよ」彼女はいう。

階下の部屋のドアをあけて、一人の女が寝ているベッドへ子供を抱きかかえていく。彼の母親である。母親が両腕をさしのべると、子供はそばにからだをすりよせた。なぜ起こされたのか、たずねもしない。女は彼の目にキスをし、やせた小さい手で、白いフランネルのねまきの上から、彼の暖かいからだをなでた。思わずぎゅっと抱きしめる。

「ねむいの、ぼうや？」彼女はいった。

声はひどく弱々しく、もうすでにどこか遠くからきえてくるようだ。子供は答えずに、ここちよきそうにはばえんだ。大きな暖かいべ

ッドのなかでそのやわらかな腕に抱かれていて、ひどく幸福なのだ。いっそうからだをちぢこめようとしながら母にびったりとからだをすりよせて、ねむそうな目でキスをする。まもなく目をとじると、もうぐっすり眠っていた。医者が進みでて、ベッドのそばに立った。「ああ、どうかまだこの子をつれていかないでください」彼女はうめくようにいった。

医者はそれには答えず、厳粛な面持で彼女をながめやる。もうそれほど長くは子供をそばにおいておくことが許されないと、女はもう一度子供にキスした。そして片手で、子供のからだを足首までなでおろした。右足を手ににぎって、五つの小さなその足指にさわってみる。それからゆつくりと左の足首をなでた。彼女はむせび泣きしはじめた。

「どうしました？」医者がいった。「疲れてらっしゃるんですね」

ものもいえずに首をふると、涙が両のはおをつたいおちる。医者がかがみこんだ。

「お子さんをおあずかりしましょう」

彼女は弱りはたてていて、医者の望みにさからう気力もなく、子供を手わたした。医者は乳母の手にその子をもどした。

「自分のベッドに寝かしてあげたまえ」

「かしこまりました、先生」

少年は眠ったままつれていかれた。母親は、いまでは悲しみにうちひしがれてむせび泣いている。

「かわいそうに、あの子はどうなるんでしょう？」

産婦づきの看護婦が彼女をなだめようとしたが、まもなく、極度の疲労から、泣き声はやんだ。医者が部屋の反対がわのテーブルに歩みよった。テーブルには、死んで生まれた赤んぼのなきがらが、タオルをかけられて横たわっていた。タオルをもちあげて、ちょっと目をやる。医者の姿はついたてのかげになってベッドからは見えないが、女には、彼がなにをしているか察しがついた。

「女の子だったの、それとも男の子？」と、看護婦にささやく。
「またばっちゃんまでした」

女は答えなかった。まもなく子供の乳母がもどってきた。ベッドに近づいて、

「フィリップばっちゃんは一度も目をおさましになりませんでしたよ」と、いう。

ちよつと言葉がとぎれた。やがて、医者がもう一度患者の脈をはかった。

「たったいまは、してさしあげられることはなにもないと思います」彼はいった。「朝食をすましてから、またうかがいましょう」

「わたしがお送りいたしますわ、先生」子供の乳母がいう。

二人はだまって階下においていった。玄関にくると、医者は足をとめた。

「ミセス・ケアリーの義理のお兄さん呼びよせただろうね？」

「はい、先生」

「何時にここへ着かれるか、わかつてるかね？」

「いいえ、電報をお待ちしてるんですが」

「あのぼうやはどうするんだ？ 邪魔にならないところへやってしまったほうがいいと思うが」

「ミス・ウオトキンが気づかるといっておられます」

「だれだね、それは？」

「ぼっちゃまの名づけ親でございます。先生、おくさまはおなおりになるとお考えでございますか？」

医者は首をふった。

2

それから一週間のちのこと。フィリップは、オンズロー・ガーデンにあるミス・ウオトキンの家の、応接間の床にすわっていた。一人

っ子で、一人遊びにはなれていたのである。どっしりした家具が部屋いっぱいにはすえつけられ、ソファには、どれもこれも、大きなクッションが三枚おいてあった。肘かけ椅子にも全部クッションがひとつずつついていて、そのクッションをすっかり集め、軽くて動かしやすい、金色に塗った夜会用の椅子を利用して、彼は念いりにほら穴をひとつ作っていた。このほら穴のなかで、カーテンの背後にひそんでいるインディアンから身をかくしているという寸法なのだ。床に耳をあてて、平原を疾駆していく水牛の群れに耳をすます。やがて、ドアがあく音をききつけると、彼は見つけられまいと息をこらした。が、手が乱暴に椅子をひきずりだし、クッションはばらばらとくずれおちた。

「このおいたさん、きつとミス・ウオトキンにおられますよ」

「やあ、エマ！」彼はいった。

乳母はかがみこんで彼にキスすると、それからクッションをはいたてもとの位置にもどしはじめた。

「もううちへかえるの？」と、彼がきく。

「そうですよ、おつれしにきましたのよ」

「新しいドレスを着てるんだね」

それは一八八五年のことだったので、彼女は腰あてをつけていた。ガウンは黒のピロッドで、袖はタイト、肩はゆるやかに傾斜して、スカートには大きなひだ飾りが三段についている。かぶっている帽子は、ピロッドのひものついた黒のボンネットだ。彼女はためらった。予期していた質問をしきれないので、あらかじめ準備していた答えをいいたすことができなかったのだ。

「お母さまの病気のことをおききにならないの？」とうとう彼女はいった。

「ああ、忘れちゃったよ、ぼく。お母さまはどうなの？」

「いよいよいいだすときがきた」

「お母さまはたいへんおしあわせでいらっしやいますわ」

「ああ、よかった」

「お母さまはいつておしまいになりましたのよ。もう二度とお会いになることはできませんわ」

フィリップにはなんのことかわからなかった。

「どうして？」

「お母さまは天国にいらっしゃるんですの」

彼女が泣きだすと、フィリップもよく意味がわからないままに泣きはじめた。エマは背の高い、骨太の金髪女で、道具の大きい目鼻だちをしていた。デヴォンシア（イングランドの南西部の州）の出で、長年ロンドンで奉公ぐらしをしてきたにもかかわらず、一度もお国なまりをなくしたことがない。涙につられてますます気がたかぶり、彼女は少年を胸にしかりと抱きしめた。この世でただひとつの、なんの利己心もない愛をうばわれたその子のあわれさが、漠然ながらに感じられる。この子が見知らぬ人の手に渡されなければならないというのは、おそろしいことのようなのだ。が、やがて、彼女は氣をとりなおした。

「ウィリアムおじさまが、ぼっちゃまに会いたいといつて、おうちで待つてらっしゃいますよ」と、彼女はいった。「ミス・ウオトキンにさよならをいいにいつてらっしゃいな、そしたらいっしょにおうちへかえりましょう」

「ぼく、さよならなんかいいたくないや」涙を見せたくないという本能から、そう彼は答えた。

「じゃあ、よろしゅうございます。急いで二階へいつて、お帽子をとつてらっしゃい」

彼が帽子をとつて下におりてくると、エマは玄関で待つていた。食堂の向こうの書斎で話し声がしている。彼は立ちどまった。ミス・ウオトキンと彼女の姉が、友達と話をしているところなのはわかっていたので、なかへはいつていつたら、みんなが自分に同情してくれるような気がしたのだ（彼は九つになっていた）。

「ぼく、ミス・ウオトキンにさよならをいいにいつてこよう」

「そうなきいまし」エマがいった。

「ぼくがいくからつて、先にいつてみんなに知らせといつてね」彼はいつた。

いまの機会をせいぜいに利用したかった。エマがドアをノックして、なかにはいつていつた。彼女の声がきこえてくる。

「フィリップぼっちゃまが、さよならをいいたいとおつしやつてますよ、ミス」

話し声が突然はたとやみ、フィリップはびつこをひきひき部屋にはいつていつた。ヘンリエッタ・ウオトキンは、髪のを染めた、赤ら顔の頑丈な女だった。当時は、髪を染めたりするとかくの評判の種をまいた時代だったので、フィリップは、彼の名づけ親が髪のを染めかえたとき、うちでさまざまな噂話をきいたものだった。姉といっしょにくらしているのだが、姉のほうは老齢に身をゆだねて満足のていである。フィリップの知らない二人の婦人が訪問中で、好奇の目で彼を見つめている。

「かわいそうな子」腕をひろげながら、ミス・ウオトキンがいつた。

彼女は泣きはじめた。そのときフィリップは、彼女が昼食に食堂にやつてこなかったわけと、黒いドレスを身につけているわけをさつた。彼女は口もきけないようすだった。

「ぼく、うちへ帰らなくちゃならないの」どうとうフィリップはいつた。

彼がミス・ウオトキンの腕をすりぬけると、彼女はもう一度彼にキスした。それから彼は、彼女の姉のそばによつて、さよならをいつた。見知らぬ婦人の一人がキスしてもよいかときくので、おごそかに許可をあたえる。泣いてはいるのだが、自分がまきおこしている興奮がたまらなく楽しくもある。もう少し長くそこにいて、ちやはやしてもらいたところだったが、彼が出ていくのをみんなが予期している気配なので、エマが待つてゐるから、と、いつた。彼は部屋を出た。エマは地下室において友達と話をしていたので、踊り場で待ちうけた。

ヘンリエッタ・ウオトキンの声がきこえてきた。

「あの子の母親は、あたしと大の仲よしでしたのよ。あの人が亡くなつたなんて、とても考えるにしのびませんわ」

「おまえはお葬式にいったいけなかつたんだよ。ヘンリエッタ」と、姉がいう。「とり乱してしまふにきまつてゐるんだから」

すると、見知らぬ婦人の一人が口を出した。

「かわいそうに、あんな小さな子が世のなかに一人ぼっちだなんて考えると、おそろしくなりますわね。びっこを引いてたようでしたけど」

「ええ、あの子はえび足なんですのよ。母親にとっては、とても悲しいことでしたけれどね」

そのときエマがもどってきた。辻馬車を呼ぶと、彼女は駟者に行き先を告げた。

3

ケアリー夫人の亡くなった家に着くと——それは、ケンジングトン区のノッティング・ヒル・ゲイトとハイ・ストリートのあいだの、ものさびしい、上品な通りにあった——エマはフィリップを客間に連れていった。おじが、贈られた花輪の札状を書いていた。着くのがおそくて葬儀にまにあわなかったそのひとつが、ボール箱にはいったまま大テーブルのつかつてゐる。

「フィリップはつちやまがお見えになりました」エマがいった。

ケアリー氏がおもむろに立ちあがって、少年に握手した。それから、思いだしたようにかがみこむと、ひたいにキスをした。中背よりもやや低めの、肥りじしの男で、長くのばした髪の毛を頭の上になであげて、禿げをかくしている。ひげはきれいにそりあげてあった。ととのった目鼻だちで、若いころは男ぶりがよかつたらうと察せられる。懐中時計の鎖に金の十字架をつけていた。

「これからおまえはおじさんのうちでくらすことになるんだよ、フィリップ」ケアリー氏はいった。「どうだ、氣にいいのか？」

二年まえ、水ぼうそうをわずらつたあとで、フィリップはその牧師館に送られたことがあったが、思い出といつては、おじやおばのことよりも、むしろ屋根裏部屋と大きな庭の記憶が残っているばかりだつた。

「はい」

「おじさんとルイーザおばさんを、ほんとうの両親だと思つてくれなくちゃいけないよ」

子供の口が少しふるえ、ほおが上気したが、答えはなかった。

「おじさんは、お母さんからおまえをあずけられたんだよ」

ケアリー氏は、どうにもすらすら考えを述べることができなかった。義理の妹が死にかけているという報らせがとどいたとき、すぐロンドンに向けて出発したとはいふものの、みちみち、もし妹が死んで、どうしてもその息子を引きたらねばならぬような羽目になったら、どんなに自分の生活が乱されることだろうかと、そのことだけしか考えていなかったのである。彼は五十の坂もはるかに越え、三十年間つねそつてきた妻には子供がなかった。そうぞうしくて乱暴者かもしれない男の子があらわれることは、けつして愉快な予想ではない。義妹が好きになれたためしも、彼には一度もなかった。

「明日おまえをブラックステイブルへつれていくつもりだ」と、彼はいった。

「エマもつれて？」

子供が彼女の手を片手をすべりこませると、彼女はそれをぎゅつとにぎりしめた。

「エマにはひまをとつてもらわなくちゃならんだろうな」ケアリー氏はいった。

「でも、ぼく、エマにいっしょにきてほしいの」

フィリップが泣きだすと、乳母も泣かないではいられなかった。ケ

アリー氏は手のほどこしようもなく二人を見やった。

「ちょっとフィリップと二人つきりにしてくれないか」

「よろしゅうございます。だんなさま」

フィリップがしがみついているのを、彼女がやさしくふりほどく。

ケアリー氏は少年をひぎにのせると、腕で抱きかかえた。

「泣くんじやない」彼はいった。「おまえはもう大きいんだから、乳母なんかいらなないんだ。おまえを学校へやることを考えなくちゃならないんだよ」

「ほく、エマにいつしよにきてほしいの」子供はくりかえした。

「お金がかかりすぎるんだよ、フィリップ。おまえのお父さんはたいして財産も残してくれなかったんだ。財産がどうなってしまうのか、おじさんにもわかりやしない。おまえの使うお金は、よくよく吟味してから使わよ」

「ならなないんだよ」

ケアリー氏は、その前日、家族の頼みつけの弁護士を訪ねていたのだった。フィリップの父は、なかなかよくはやった外科医で、病院の施設などから見れば、当然確固とした地位を築きあげているはずであった。だから、彼が突然敗血症で死んだとき、生命保険と、ブルートン街にある屋敷を他人に貸して得られる家賃のほかは、ほとんどなんの財産も未亡人に残していないことがわかったのは、ひとつの驚きだったのである。これは六か月まえのことだが、そのあと、子供をおなかにもって、すでに健康の衰えはじめていたケアリー夫人は、とほうにくれるのあまり、屋敷を貸すのに最初のつけ値に飛びついた。彼女は家具を倉庫に保管させ、子供が生まれるまで不便のないようにと、べつに家具つきの家を、牧師には法外きわまると思われる家賃で、一年契約で借りた。だが、生まれてこのかた金のやりくりにはまったく不なれで、状況の変化に応じて出費の調節のできるような女ではない。残されたほんのわずかな金もあれやこれやでだんだん少なくなり、いまではいっさいのかかりを支払ってしまうと、自分で生活できるようになるまでの少年の扶養資金としては、二千ポンドそこそこしか残っ

ていなかったのだ。こういうことをすっかりフィリップに説明してきかせることは不可能だったし、それに彼はまだ泣きじゃくっていた。

「エマのところへいくがいい」子供をなぐさめるには彼女がいちばんであることを痛感して、ケアリー氏はいった。

フィリップは、ひとこともいわずにおじのひざからすべりおりた

が、ケアリー氏はその彼をおしとどめた。

「おじさんは、土曜日にはお説教の準備をしなきゃいけないから、どうしても明日出かねくちやならない。だから、今日のうちにおまえの荷物をまとめておくように、エマにいうんだよ。おもちゃは全部も

っていつてよろしい。それから、お父さんとお母さんの思い出になるようなものがほしかったら、それぞれひとつずつもっていいよ。ほかのものは全部売ってしまうことになるから」

少年はそつと部屋を出ていった。ケアリー氏は雑用にはなれていなかった

ので、憤りを感じながら手紙を書きにかかった。デスクの片が

わに束になった勘定書がのっかっているが、これも憤懣のたねである。とりわけそのうちの一枚は、不合理きわまりないもののように思

われた。ケアリー夫人が亡くなった直後、エマは、夫人のなきがらが

安置されている部屋を飾るために、おびたらしい量の白い花を花屋に

注文していたのである。これはまったくの金の浪費というものだ。エ

マはあんまり自分勝手にやりすぎる。経済上の必要がなくても、どの

みちひまをとらせることになったろう。

だが、フィリップは彼女のところへいき、その胸に顔をうずめて、

胸もはりさけんばかりに泣いた。すると彼女も、まるで自分の息子の

ような気がしてきて——彼女が彼の世話を引きうけたのは、生後一か

月のころである——やさしい言葉で彼をなぐさめるのだった。ときど

きは必ず会いにくるし、けつしてぼっちゃまのことを忘れはしないと

約束し、彼がこれからいく田舎のことや、デヴォンシアの自分の家の

こと——彼女の父親は、エクスター（デヴォンシャー州の首都）に通ずる本街道で通行

税取立ての役人をしていて、豚小屋には豚がいるし、牝牛も一頭いる

うえに、その牝牛はこどもを一匹生んだばかりだ——など話してきかせているうちに、とうとうフィリップも涙など忘れてしまつて、近づいてくる旅路のことを考えて興奮しはじめた。やがて彼女は、用事が多いので彼をひざからおろし、彼もベッドに自分の衣服をひろげる手つだいをした。おもちゃを集めに子供部屋へやられると、まもなく彼はたのしそに遊んでいた。

だが、とうとう一人遊びにもあきて、寝室にもどつてみると、エマは今度は彼の身のまわりのものを大きなブリキ箱につめていた。すると、父母の思ひ出になるようなものをなにももつていってもいい、と、おじがいったことを思いだした。エマにそのことをいって、なにをもつていったらいいかとたずねる。

「客間へいって、なにか好きなものをさがしておいでなさい」

「あすこにはウィリアムおじさんがいるんだもの」

「そんなこと気にすることありませんよ。あれはもうみんなぼっちゃまのものなんですから」

フィリップがそうと下においていってみると、ドアがあいていた。ケアリー氏は部屋にはいなかった。フィリップはそつとなかを歩きまわつた。一家がこの家でくらすようになってからまだほんのわずかししかたっていないので、とくに彼の興味を引くようなものはほとんどない。他人の部屋も同然で、フィリップには、氣にしているようなものはなにも見つからなかった。だが、どれが母親のもちもので、どれが家主のものか見わけがついたので、やがて彼は、かつて母親が好きだといつたのをきいた覚えがある、小さな置き時計に目をとめた。この時計を手にとると、ふたたびやるせなげな顔をして二階へあがつていった。母親の寝室のドアの外で立ちどまると、耳をすました。なかへはいつてはいけないうと、だれもいいたものはいないのに、はいっていくのは悪いことのような気がする。少しこわくもあり、胸はいやな動悸を打っているのだが、同時に、なぜかしらそのどつてをまわさないではいられないような氣持だ。まるでなかにいる人にきかれまいとす

るかのように、そうとそれをまわすと、それからゆつくりとドアをおしあける。一瞬敷居に立ちすくんでから、やつとはいっていく勇氣が出た。もうこわくはなかったが、異様な感じである。背後にドアをしめる。ブラインドが引きおろされて、一月の午後の冷たい光がただよい流れている部屋のなかはうす暗い。鏡台にケアリー夫人のブラッシと手鏡のついている。小さな皿にはヘアピン。彼の写真と父親の写真が炉棚に立ててある。母親がいなくてよくこの部屋へはいつたものだったが、いまではちがう部屋のように見える。椅子のたたずまいも、なんとなく異様な感じだ。ベッドは、だれかが今晚寝るつもりにでもしているみたいにきちんととのえられ、枕の上の衣袋箱にはねまきが一枚はいっていた。

フィリップは、ドレスがいっぱいはいっている大きな押し入れをあけると、なかにはいりこんで、かかえられるだけドレスをかかえこんで、そのなかに顔をうずめた。母親が使っていた香水のにおいがした。それから、母親の衣類のつまっている引きだしをあけて、なかをながめた——リンネル類のあいだにいられたラヴエンダー袋(虫よけ、または香りをつけるための)の香りが、すがすがしく、こころよい。部屋ももう異様ではなくなり、母親がたつたいま散歩に出かけたところのような気がする。まもなくもどつてきて、子供部屋で彼といつしよにお茶をのむために、二階へあがつてくるだろう。するともう、唇に母のキスが感じられるような気がするのだった。

二度とお母さんに会えないなんてうそだ。そんなことはあるはずがないから、うそにきまつている。彼はベッドにあがりこんで、枕に頭を押しつけた。そのまま彼はじつと横たわっていた。

4

フィリップは泣く泣くエマと別れたが、ブラックステイブルまでの旅はたのしく、着いたときにはもうあきらめて、元氣になっていた。

ブラックステイブルは、ロンドンから六十マイルはなれたところにある。荷物を運搬人夫にあずけると、ケアリー氏はフィリップをつれて、牧師館に向かつて歩きだした。五分をそこしかなからず、牧師館につくと、フィリップは突然その門のことを思いだした。棧の五本ついた赤い門だった——ちようつがいがついていて、両がわにらくらくとゆれ、してはいけないことになっていたが、それにのって前後にこぐことができる。二人は庭をぬけて、玄関の入口にきた。この入口は、客があるときと、日曜日と、牧師がロンドンへ出かけたり帰ってきたりするような特別の場合だけしか使われない。家の出入りには脇のドアが利用され、ほかにも、庭師や、乞食や浮浪者用の裏口がひとつついている。赤屋根の、黄れんが造りのかなり大きな家で、二十五年ほどまえに教会ふうに建てられたものである。玄関の入口は教会玄関のようで、客間の窓はゴシックふうだった。

ケアリー夫人は、二人の乗ってくる汽車を知っていて、客間で待ちながら、門のあく音を耳をすましていた。その音がきこえると、玄関口に出てきた。

「ルイーザおばさんだよ」彼女の姿を見るなり、ケアリー氏がいう。「かけていって、キスをしてあげ」

フィリップは、えび足を引きずりながら不器用にかけだしたが、やがて立ちどまった。ケアリー夫人は、夫と同じくらいの年輩の、小がらな、しぼんだような女で、顔には深いしわが驚くほど無数にきざまれ、目はうす青かった。半白の髪の毛を、娘時代にはやった髪型そのままに、小さな巻毛に作っている。黒いドレスを着ていて、装飾品といつては、十字架のさがっている金の鎖だけしかない。はにかんだような物腰と、やさしい声の持主だった。

「まあ、歩いてらしたの、ウィリアム？」と、夫にキスしながら、ほとんどなじるようにいう。

「いや、そこまでは考えつかなかったよ」甥のほうにちらと目をやりながら、彼は答えた。

「歩いたりなんかして、痛みはしなかったでしょうね、フィリップ？」彼女は子供にきいた。

「ううん。ばく、いつだって歩くんですよ」

彼は二人の会話にちよつとびっくりしていたのだった。ルイーザおばがはいるようにいったので、二人は玄関にはいった。そこには赤と黄のタイルがしきつめられ、タイルにはギリシア十字架と神の子羊の模様が交互に型どってあった。どっしりした階段が玄関から二階にっている。独特なおいのおいのする磨きあげた松材で作ったもので、教会に新しい席が設けられたとききいいわいたつぷり材木があまつたおかげで、ここにすえつけられたのである。手すりには、四福音書の著者をあらわす象徴的な模様が刻みつけられていた。

「旅行からお帰りになつたあとでは、きつとお寒いことだろうと思つて、ストーブを燃やしておきましたよ」と、ケアリー夫人がいった。

それは、玄関の広間にすえつけられている大きな黒いストーブのことで、天候がひどく悪いときか、牧師が風邪をひいているときだけしか燃やされなかった。ケアリー夫人が風邪をひいても、それは燃やされない。石炭が高価についたからだ。そのうえ、女中のメアリー・アンは、家じゅうに火の気のあることはいやがった。もしどうしてもそれだけ全部火の気があるのなら、もう一人女中をやとっていただかなければなりません、というのである。冬には、ケアリー夫妻は、暖炉の火はひとつですむように食堂でくらししたので、夏になつてもそのくせがぬけず、いきおい、客間は、日曜の午後ケアリー氏が昼寝に使うだけになった。だが、毎土曜日には、説教の原稿が書けるように、彼は書斎に火をいれさせた。

ルイーザおばはフィリップを二階へつれていって、車道を見はらす小さな寝室に案内した。窓のすぐまえに大きな木が一本立っていたが、いまフィリップはその木を思いだした。枝がたいへん低くて、かなり高いところまでのばれたものだった。

「小さい子には小さい部屋がいいのよ」ケアリー夫人がいう。「一人